

【書評】

Nicolas Murena, *Le « mime de rien » de Philippe Lacoue-Labarthe*
(Hermann Éditeurs, 2022)

若杉直人

本邦において、フィリップ・ラクー＝ラバルトという人物の存在が殊更に注目されることは少ない。少し上の世代のジャック・デリダや、ラクー＝ラバルトと同世代で何冊もの共著を出したジャン＝リュック・ナンシーの研究は盛況のうちにあるが、ラクー＝ラバルトの思想については十分に研究されているとは言い難い状況である。ただ、彼の著作は邦訳も出版されており、代表的なものを挙げれば、ハイデガー問題を扱った『政治という虚構』やミメシスの脱構築を企てた『近代人の模倣』、さらには最近邦訳された『文学的絶対』などを挙げるができるだろう。では、これらの著作から浮かび上がってくるラクー＝ラバルト像とはいかなるものだろうか。ハイデガーに抗い続けた哲学者か。それともミメシスの問題を研究した哲学者か。あるいはドイツロマン主義文学をフランスに紹介した文学者だろうか。

Nicolas Murena による *Le « mime de rien » de Philippe Lacoue-Labarthe* が提示するラクー＝ラバルト像は、上記のいずれでもない。著者は冒頭で、「フィリップ・ラクー＝ラバルトは詩を書く哲学者だと思われがちだが、哲学書を書く作家 (écrivain) であったとしたらどうだろうか (p. 1)」という問いを立て、彼を一人の作家として提示しようとする。確かに、彼が遺した作品の中には、*L'« Allégorie »* (2006 年) や *Phrase* (2000 年) といった詩作品が存在し、このことを踏まえてラクー＝ラバルトを「詩を書く哲学者」と呼ぶことは可能であろう。しかし本書は、彼を「哲学書を書く作家 (écrivain)」として捉え直そうとしている。

さて、著者である Nicolas Murena は「創造に関する比較研究センター (CERCC)」の研究者であり、本書は彼が 2019 年にリヨン高等師範学校で博士号を取得した際に提出した博士論文をもとにして刊行されたものである。本書の内容を概略しておく、第一部「ミメトロロジーからの哲学の脱構築」は、哲学的伝統の中で果たすミメシスという概念の役割についてのラクー＝ラバルトの分析を参照しつつ、彼が「無 (rien) の模倣 (mime)」を定式化していく中で、模倣という概念が変質していく過程を記述している。第一章ではデリダのマラルメ論「二重の会」を適宜参照しつつ、「無の模倣」とはいかなるものであるかを描き出し、その論点をまとめている。第二章ではラクー＝ラバルトが「無の模倣」を構想したのにはハイデガーの影響があったということを、続く第三章ではラクー＝ラバルトがハイデガーとその歩みを異にしている点を、それぞれ *Darstellung* という語彙を鍵語としながら示している。そして模倣という概念の脱構築が、最終的に悲劇的舞台の脱構築に結び付くことを示している (第四章)。

第二部「舞台と詩の脱形象化」は第一部で行った作業をもとにして、ラクー＝ラバルトの詩集

Phrase の分析を行っている。第五章、第六章ではラクー＝ラバルトがヘルダーリンの翻訳を手掛けたことを取り上げ、この翻訳の実践は「書く」ことの実践と同じく、そこにモデルは不在であるということを示し、さらに翻訳の作業が *Phrase* の執筆にどれほどの影響を与えたのか、その射程を明らかにしている。また、ラクー＝ラバルトのオペラに関する考察を持ち出し、その中で彼がオペラからオラトリオ（演技を伴わない楽曲）へと移行していることを踏まえ、*Phrase* を一種のオラトリオとして解釈することを試みている（第七、八、九章）。

そして第三部「人生 - 記からの迂 - 路 (LE DÉ-TOUR DU BIO-GRAPHIQUE)」は、ここまでの研究内容を、書き表す際の主体の問題へと収束させていく。第十章では、ラクー＝ラバルトとフランソワ・マルタンの共著で、自画像をめぐる実験的著作の *Retrait de l'artiste, en deux personnes* (1985 年) を、第十一章では、ラクー＝ラバルトが自らの死を目の当たりにした青年期を回想した *Préface à La Disparition* (2009 年) を取り上げ、それらが bio-graphie であるということ、つまりハイフンを使用することによって主体と書くことの間にある完全な結びつきを示すと同時に、書くという行為において「主体」を自分自身から切り離す隔たりがあるということを示そうとする。そして、最終的には *Phrase* を作品体験における書く主体であるところの「無」が定式化された作品集として読むことを試みている。

さて、本書の特徴としては、冒頭で述べた通りラクー＝ラバルトを哲学者ではなく作家 (écrivain) として捉えようとしている点を挙げるができるだろう。これは、本書が *L'« Allégorie »* や *Phrase* といった詩作品を取り扱っているからというわけではない。著者が主張するところによると、ラクー＝ラバルトのテキストは決して哲学を構成するものではないためである (p. 355)。彼が定式化しようとする「無の模倣」の「無」とは、模倣するものとも模倣されるものとも理解することができるものであり、それゆえに哲学を根底から脅かすものである (p. 9)。すなわち「無」とは哲学と存在論が崩壊する一種の「消失点」であり、この「模倣」を定式化しようとするラクー＝ラバルトの作業を、彼の哲学的著作だけでなく、詩作品をも参照しながら分析することによって、彼が（何らかの存在論を打ち立てようとする）哲学的意志を停止させる過程を描き出している。そして、そこで我々が目にするラクー＝ラバルトの姿は、「無力さ」や「挫折」を認めながらも言葉を紡ぎ出そうとする作家としての姿である (p. 75)。このようにしてラクー＝ラバルトを作家として捉えたうえで、そこから *Phrase* の分析を試みる本書は、新たなラクー＝ラバルト像を提示する著作であるといえるだろう。